

『伽倻子のために』との出会い

酷暑の夏が過ぎ去ったかと思えば、寒い冬がやって来る。世の中なかなか動かないことがあったかと思えば、目まぐるしい速さで過ぎ去ってしまうこともある。森を歩けば、団栗色（どんぐりいろ）、照柿色（てるがきいろ）、淡黄葉（うすきはだ）、赤丹（あかに）、日本古来の秋色が、風に揺れ舞い上がり、くるくると足元で微笑む。皆様をお迎える、秋のこの一日。

40年前の10月、私は前橋から邑楽町に越してきた。前橋を離れるその8月に、10歳の娘と封切られたばかりの『伽倻子のために』の映画を見た。坂道を下った2階にある小さな映画館で、一日に続けて3回見た。これって何。こんな映画見たこと無い。それもこの映画を製作した監督が自分の住んでいる前橋にしているというのだ。驚きと嬉しさで、私の中の映画が変わった。

映画は映像。その映像が透き通るように美しい。激しい動きやこれでもかと押しつけ迫って来るものもない。余分な色もない。二人の恋の佇まいが、夜のポプラの林の中で、大沼の綿毛が風に揺れる中で、描かれたすべてのありようが心の中に入りこみ離れない。映像や言葉の中にある隙間とでもいうのか、そのわずかな時間が見る者の心を豊かにさせてくれる。見ながら聞きながら考える。考えるということは、心震えるということ。いいものを見れば、そこには何とも言えない人を思うやさしいが溢れているのだ。

雪の坂道で、青年がこれまで生きた時間を辿るかのよう、これから生きる時間が刻まれるかのよう、微かに、サク、サク、と踏みしめられる雪の音が聞こえる。流れる音楽に包まれながら、私たちは多くのことを思い描くに違いない。ユウリー・ノルシュテイン監督のアニメーションとの番組が、一みん家で映画を見る 映画で出会うであったなら、こんなに嬉しいことはない。

参加し支えてくださった4000人にも及ぶ皆様。これからも皆様と一緒に映画を見る喜びが続くことを願っております。

最後に、この映画会を静かに見守り力強く導いてくださいました、小栗康平監督に心より感謝申し上げます。

邑の映画会は、多くの皆様に支えられ協力していただき、第15回を迎えることができました。関係者の皆様に心より感謝申し上げます。
(株) 藤田ビジネスプロモーター社長藤田隆様・35mmフィルム上映／朝日印刷工業(株) 会長石川靖様・チラシポスター印刷／東京国立近代美術館フィルムセンター(現国立映画アーカイブ) 主幹とちぎあきら様・フィルム映画指導／宙デザインオフィス代表糸井徹様・チラシポスターデザイン／アプレオ(有) 竹内威夫様・HP製作／AVC 滝沢敏雄様・映画上映／シネマテークたかさき様・映像指導／一般社団法人コミュニティシネマセンター事務局長岩崎ゆう子様・作品支援／元布由院子ども映画祭代表後藤睦文様・映画祭指導／pop-life-works 永本浩之様・チラシポスターデザイン補助

人が人を思うように

群馬県邑楽郡邑楽町(おうらまち)で年に一回「邑(むら)の映画会」なるものが催されている。邑楽町の「邑」は「おう」「ゆう」とも読み、意味としては「むら」である。今やどの町にも村にも映画館はないから、主催者が「邑の」とむしろ胸を張っているようで、いいネーミングである。始まったのは二〇〇八年で、コロナ禍で三年休んで今年で十五回を数えるまでになった。その第一回目の番組はアルベール・ラモリスの『赤い風船』と『白い馬』、川本喜八郎の人形アニメーション『花折り』、フレデリック・バックの『木を植えた男』、そして私の『泥の河』だった。

子供も大人もいっしょに楽しめることを求めた上映会だが、これは群馬県で始まった小学生のための映画教育が下地となっているからである。

『眠る男』(一九九六年)は群馬県が製作した映画で、である以上は学校教育の場で子供たちにも広く見てもらわなくてはならない。しかし先生方が見ても『眠る男』はよく分からない。だったら「鑑賞の手引き」を作ろうと県の教育委員会から私のところに相談があった。その手のものはろくでもないものと相場は決まっているので、だったらいつそのこと公教育の場で映画教育を始めませんか、と提案したのがこの起こりだった。

メディアリテラシーと言った学習はそれまでもなかったわけではないけれど、映画そのものの仕組みを学ぶ映画の教育は日本では行われていなかった。仕組みと言ってもさほどたいしたことではなく、映画はショットが組み合わさって出来ている、そのショットは作り手の意志によってフレームが、アングルが決められ、ショットの長さもそれぞれに意味がある、といったまったくの基本を学ぶもので、つまりは、映画は「作られたもの」であることを具体的に知っていくための勉強である。

とは言え「成績を上げてほしい」が優先する教育の現場では、映画なんて見ればわかるでしょうが大方で、すんなりと成立する話でもなかったが、『眠る男』の製作は知事の小寺さんが陣頭指揮をとったものだから、無下に潰すわけにもいかず、限られた学校、限られた先生たちによってなんとか動き始めた。私も先生たちの集中講義に出向き、いくつかの小学校へ出前授業にも行った。映画のそれぞれの好み、恣意的に、商業的に形作られる前に、やるべきことがあると考えてのことだった。しかし世の中の一般としても映画を学ぶことそのものがあまり理解されず、知事が交代したら潮が引くように映画教育は消えてなくなった。政権が変わったの意趣返しのようなこともあったかもしれない。

でも折角始めたいいい取り組みなのだからそのまま立ち消えにしてしまうのは残念だと考えた人たちもいて、その精神を引き継ぐように立ち上げたのが「邑の映画会」だった。

いわば映画教育の発展的継承だから、どういう映画を組み合わせたらいいのか難しかった。私も作品選定にはかわってきている。

ユウリー・ノルシュテインのアニメーション、小津安二郎、清水宏の作品、ピクトル・エリセの『ミツバチのささやき』。ゴービンダン・アラビンダンの『魔法使いのおじいさん』は、切れていた著作権の許諾をとるために会の代表者である加藤一枝さんが直接、インドのエージェントと交渉したりもした。しかし、回を重ねる毎にだんだんと手詰まり感のようなものが生じてきたのも事実である。子供たちのためのワークショップをいつも併設してやってきてはいるけれど、二兎が追えない。

だったら自分たちが本当にやりたいと思うことをやろう、と今年になって出てきたのが拙作『伽倻子のために』だった。これまでも上映の候補作品に上がっていたとのことだったけれど、在日韓国・朝鮮人を主人公とする「政治的、歴史的問題」、若者たちの恋と性愛、などなど地域社会に気づかって躊躇してきたところなしとは言えず、踏み切れなかったようだ。相談を受けて、ぜひやってほしいと私からお願ひした。

今の世の中の中心にあるのは、AIを筆頭としたデジタル万能の社会認識だろう。携帯電話、パソコンの本人認証は画像で瞬時になされる。至る所に設置されている「防犯カメラ」なるものによって「犯罪者」の割り出し、追跡も全国エリアで可能になっているらしい。加えて、フェイク画像の反乱は目を覆うばかりになった。これらの画像に根本的に欠けているのは、人が人を思う、その情動の強さだ。当然と言えば当然のことだが、今や映画のそれもそうならないかと心配になっている。思いのかけらも感じられないような、物語が指示しているだけの人物の像を見せられてもころは動かない。なにか大きなことがずれたまま崩れているようにも感じられる。

恋するように、慕うように、焦がれるように、思い、心配もして、人の姿を思い浮かべることが、人間の眼差しの根底にある。映画はそこに依拠していた。人が人を思うように私たちは人を見ている。私の作品の中では『伽倻子のために』でその思いが強かったように思う。人だけではないかもしれない。風景も自然も、ものも、いのちがいのちあるものに向かい合うときには、必ず生きて動くものがある。

『伽倻子のために』は十一月一日に邑楽で上映される。詳しくはいずれここでのお知らせでもお伝えしたい。私も行って短い挨拶をしようと思っている。

小栗康平オフィシャルサイト
OGURI.info(<https://oguri.info>)より許諾を受けて転載